

バヌアツ共和国における 沿岸資源利用と管理の現状と課題

瀬 木 志 央

The Current Status of Coastal Resource Management in Vanuatu and its Challenges

SEGI Shio

Abstract: Coastal marine resources have been central to the lives of people in the Pacific region, including those in the Republic of Vanuatu, for their economic significance as well as securing food. For the management of coastal marine resources, Vanuatu has implemented a hybrid form of resource governance based on their traditional management system together with more a modern Western scientific management system. The use and management of marine resources, however, has been greatly affected by phenomena such as rapid commodification of resources and globalization. This research aims to review the current status of coastal marine resource use and management and examine the challenges of resource management in the broader context.

Key Words: Community-based coastal resource management, fisheries management, customary, marine tenure, small-scale fisheries, Melanesia

抄録：島嶼国であるバヌアツ共和国において、沿岸漁業は人々の食料安全保障及び現金収入の確保において重要な生業活動である。沿岸漁業で最も重要な漁場はサンゴ礁海域であり、漁具をほとんど用いない採捕活動から釣りや刺し網など多様な漁撈活動が展開されている。この海域では、慣習的の海域所有制度をベースとした資源利用者主体の管理制度と、政府による管理制度が相互補完的に実施されている。こうした管理制度の課題点として、ローカルな資源管理ルールに対する遵守意識が低下していること、水産資源の急激な商業化に対して十分適応できないこと、土地利用の変化に伴う資源利用者の締め出しにより、資源管理の基盤となる慣習的の海域所有制度が脆弱化することが挙げられる。

キーワード：共同体基盤型沿岸資源管理、漁業管理、慣習的の海域所有制度、小規模漁業、メラネシア

はじめに

バヌアツ共和国（以下、バヌアツ）を含む南太平洋の島嶼国ではその自然環境から、沿岸資源は食料確保や経済活動の観点から人々の生活の中で重要な役割を果たしてきた。また沿岸資源の管理においては、伝統的な社会組織に基づく慣習的の海域所有制度を基盤とした慣習的のルールに、西洋科学に基づいた近代的漁業管理手法を取り入れたハイブリッドな管理体制を敷いてきた。一方、近代化やグローバル化による外部社会からの影響は、資源の利用や管理にも様々な影響を及ぼしている。

本稿は、バヌアツの沿岸地域、とりわけサンゴ礁海域にておこなわれる資源の利用と管理の状況のあらましについて示し、そこから浮かび上がる課題点を整理することを目的とする。バヌアツにおける沿岸資源を巡る状況

は、主に英語による論文や報告書にて記述され、一定の研究蓄積がなされているものの、日本語による文献は少ない。また、既存研究の多くは焦点を当てる特定の研究分野の文脈の中（例えば経済開発、食料安全保障、ジェンダー平等）で沿岸漁業に触れるものの、沿岸資源の利用と管理の状況を総論的に概説するものも限られている。

本稿はまず初めに、バヌアツの概要を示し、バヌアツにおける沿岸漁業の状況やその重要性を概観する。次に、沿岸資源管理体制について解説し、そこから見えてくる課題について検討する。現地調査は首都ポート・ビラが位置するシェファ州エファテ島にて 2019 年 7 月 24 日から 8 月 8 日まで実施した。現地調査では、ポート・ビラをベースに、国際協力機構（以下、JICA）がバヌアツで実施する「豊かな前浜プロジェクト」の関係者、バヌアツ政府のバヌアツ漁業局、環境保護・保全局、観光局、土地局といった政府機関の他、シェファ州の土地局、バヌアツ環境科学協会、バヌアツ文化センターの職員などから聞き取り調査をおこなった。また、エファテ島北部に位置するマンガリリウ、レレパ・ランディング、ポート・ハバナ、南部のパゴを訪問し住民への聞き取り調査をおこなった。

1. バヌアツ共和国の概要

バヌアツは南太平洋の南西部に位置し、パプアニューギニア、フィジー、ソロモン諸島、ニューカレドニア等とともにメラネシア地域の一部をなす島嶼国である。大小 82 の島々は南北に約 1,300 キロにかけて Y 字型に連なり、その大半は火山島だ。国土面積は 12,274 km² と、新潟県をやや小さくした程度である。首都はエファテ島のポート・ビラに置かれ、北部のエスピリトゥ・サント島のルーガンビルとともに小規模な都市を形成する。人口は 2017 年のミニセンサスによると 272,459 人であり、およそ 20% は、ポート・ビラ及び北部のエスピリトゥ・サント島に位置する第 2 の都市ルーガンビル周辺の都市部に住み、残りの 80% は地方の村落に住んでいる。バヌアツにはおよそ 3,000 年前にオーストロネシア系の人々が最初に移住してきたとされ、その後、パプアニューギニアのビスマルク諸島からソロモン諸島を通り断続的にメラネシア系の人々が移住してきたと考えられている (Posth, Nagele et al. 2018)。現在の人口比率は二・バヌアツと呼ばれるメラネシア系の人々が 90% 超を占め残りはイギリス、フランス、オーストラリア、中国等にルーツを持つ移民である。

バヌアツの独立国家としての歩みは比較的新しい。バヌアツの島々がヨーロッパ人により「発見」されたのは 1606 年、当時ヨーロッパで望まれた「南の大陸 (テラ・アウストラリス)」の発見のため航海に出たスペイン人探検家キロスによるものである。その後、ニューヘブリデスと名付けられた島々は、紆余曲折を経てイギリスとフランス両国による共同統治という植民地支配を経験し、独立を果たしたのは 1980 年のことである (MacClancy 2007)。

比較的国土が小さく、人口が少ないにも関わらず 100 から 130 とも言われる異なる民族・言語グループが存在するため、バヌアツはしばしば世界で最も「国民一人あたりの文化多様性」の高い国であると言われる。これら言語の殆どはオーストロネシア語族の太平洋諸語に属し、その大半が現在でも日常生活の中で使用されているが、植民地支配の中で消滅してしまった言語、また使用者の減少から消滅の危機にある言語も存在する (内藤 2015)。高い言語多様性の中で異なる集団に属する人同士の、また貿易で訪れた西欧人との意思疎通のため、バヌアツでは英語をベースとして形成されたクレオール言語、ビスラマ語が公用語として広く使用されている。この他、植民地支配の影響から英語とフランス語も公用語である。

海に囲まれた島々に生きるバヌアツの人々にとり、沿岸の水産資源は非常に重要である。島々の周りには裾礁 (フリンジング・リーフ) が発達し、サンゴ礁海域やその先に広がる沿岸海域では多様な漁業がおこなわれている。その一方、高い生産性を持つマングローブ林や汽水域といった生態系、堡礁、ラグーンは少ない。排他的経済水域 (EEZ) は 663,251 km² であり¹⁾、これは日本の排他的経済水域の 15% 程度である。

1) バヌアツは南部のマシュー島及びハンター島を巡る帰属について、隣接するニューカレドニア (フランスの海外領土) と争っている。両島をバヌアツの領土に含んだ場合の排他的経済水域は、バヌアツ政府による 827,626 km² になるとされる。

2. バヌアツにおける沿岸漁業の位置づけ

沿岸漁業は人々にとり重要な動物性タンパク質源かつ経済活動である。2016年におこなわれたミニセンサスでは、都市部では22.8%の世帯が、都市部以外では57.8%の世帯が過去12ヶ月内に何らかの漁撈活動に参加したと回答している。沿岸でおこなわれる漁撈は、海岸から裾礁の縁までの海域でおこなわれる漁撈、裾礁の先でおこなわれる漁撈の2つに大別できるが、本稿ではこれらを合わせて沿岸漁業と呼ぶこととする。以下では、食料安全保障及び現金収入源の観点から、バヌアツにおける沿岸漁業の位置づけを概観する。

(1) 沿岸漁業と食料安全保障

バヌアツはその地理的特性上、自然災害に頻繁に見舞われる。バヌアツは「火の環 (Ring of Fire)」と呼ばれる太平洋火山帯の位置し、国内には陸上と海底に合わせて9つの活火山が存在する²⁾。噴火により住民が移住を余儀なくされることもしばしば起こるほか、噴煙により生じた酸性雨が作物の育成を阻害することも珍しくない。また、島々はプレート境界近辺に位置するため頻繁に地震が発生し、それに伴う津波により大きな損害をもたらされることもある。例えば、1999年11月にバヌアツの東部沖で発生したマグニチュード7.1~7.5と推定される地震では最大6.6メートルの津波が発生し、広範囲に渡る沿岸集落を襲い、人々の生活や生業の場を破壊した (Caminade, Charlie et al. 2000)。

加えて、バヌアツ近辺では熱帯低気圧が発達しやすく、頻繁に大嵐が島々を襲う。2015年3月にバヌアツを襲ったカテゴリー5³⁾の猛烈なトロピカル・サイクロン・パム (TC-Pam) では、188,000人 (World Vision 2018) もの人々が被害を受けたとされる。サイクロンによる雨風は農耕地や漁船・漁具を破壊する他、しけにより漁に出られなくなることから、食料確保に直接的な影響を与える。その一方で、エルニーニョ現象による対流活動の変化によりバヌアツでは干ばつも定期的に発生し、穀物生産に大きな影響をもたらす。こうした状況から、バヌアツは国連大学による2016年世界リスク指標にて、世界で最も自然災害リスクの高い国に挙げられている (UNU-EHS 2017)。

不確実性の高い自然環境に生きるバヌアツの村落社会では、頻繁に起こる災害被害の中でも食料安全保障を維持するため、伝統的に生業活動の非専門化 (non-specialization) が実践されてきた。Hickey (2007: 148) によると、災害による食料不足のリスクに対応するため、村落では果実の発酵保存や、平常時には食べることをしない代替食物の栽培がおこなわれる他、水産物の捕獲も重要な役割を果たす。また多くの沿岸村落ではサンゴ礁海域の一区画にシャコガイを集め潜在的な非常時用食料として維持するほか、個体を近接させて育成させることで、より効率的に再生産を図っているという。特に干ばつ等による食糧不足時には、水産物と長期間の保存が可能な根菜類との交換がおこなわれるなど、水産物は災害時の食料確保に重要な役割を果たす。

災害時の食料安全保障における沿岸域での漁撈活動の重要性は、前述のトロピカル・サイクロン・パムの被災からも報告されている (Pakoa, Nagashima et al. 2019)。Eriksson ら (2017) によると、強烈的なサイクロンにより農地に甚大な影響を被り食料安全保障が悪化した沿岸村落では、被災後数週間はしけにより海に出ることができず、1、2ヶ月は援助物資により凌いだ。しかし、しけが収まり、援助物資の供給が途切れ始めると、食料確保のため多くの人々がサンゴ礁海域にてスピアや刺し網を用い漁撈に従事した。また、マンガリリウでの聞き取りによると、災害収束時には平常時に課される沿岸資源の利用に関する制限や規則は一時的に解除されたという。

(2) 沿岸漁業と現金収入

バヌアツを含むメラネシア社会における経済は、貨幣が広く流通するフォーマル経済が浸透する都市部、伝統的慣習に基づいたインフォーマル経済が支配的なそれ以外の地域に二分される。例えば、通貨バツは都市部以外でも流通しているものの、日常生活の中での使用は限られており、大量の通貨が用いられることは少ない。むしろ

2) バヌアツ気象・ジオハザード省のウェブページ (<https://www.vmgd.gov.vu/vmgd/index.php/geohazards/volcano/our-active-volcanos>) の情報による。

3) サファ・シンプソン・スケールの最高区分。最大風速の1分平均が時速250kmを超えるサイクロンがこれに該当する。

ろ、大きな支払いが発生するような饗応や家屋の建築などには豚、パンダナスの葉で編んだマット等の伝統的貨幣によりおこなわれる (吉岡 2018)。これは、村落ではある程度の自給自足や物々交換を基本とした社会システムが存在しており、サービス業等が発達する都市部を除けば、人々の現金収入源は限られていること意味している (Hickey 2008)。

漁撈を通じた水産物の獲得は、こうした村落社会において、重要な現金収入源となる。2010 年の世帯収入支出サーベイ (Household Income and Expenditure Survey) によると、都市部世帯の 2%、地方部世帯の 12% が漁獲を現金に変えていた。エファテ島の場合、農村部で明け方にかけて獲られた水産物は、鮮魚として販売される場合、ポート・ビラに運ばれるパターンと、水揚げされた近辺に留まるパターンが観察された。前者の場合、漁民、あるいは漁民から漁獲物を購入した地元の仲買人が、長くて 1 時間半ほど掛けて自家用車や乗り合いバスでポート・ビラまで魚を運ぶ。魚は市場の駐車場の一角にて、個人の客を相手に売られる他、人気の高いプレ (poulet)⁴⁾ と呼ばれる深海性のタイ類は付き合いのあるホテルやレストランに直接販売されることも多い (写真 1)。後者は農村部であっても近隣にホテルやレストランがある場合であり、同様に漁獲は商業施設に直接販売される。また水産物のうち、加工や調理をして付加価値を高めて市場などで売られ現金に変えられることも多く、そこで得られた利益は、ガーデンと呼ばれる小規模な畑への投資や、子供たちへの教育に費やされる (Kronen and Vunisea 2007, Kronen and Vunisea 2009, Gereva and Vuki 2015)。



写真 1 市場の駐車場で漁獲を売るエファテ島北部のグナ島出身の漁師と妻 (筆者撮影)

3. 沿岸漁業の状況

バヌアツの村落社会における生業の中心は農業であり、漁業はそれを補完するものという位置づけにある。しかし、男女を問わず、バヌアツの人々の大半は何らかの形で沿岸での漁撈に関わっていると言っても過言ではない。前述の世帯収入支出サーベイによると、成人人口の 75% は何らかの漁撈活動をおこなっているとされ、その殆どは沿岸漁業に従事したと推測される。

システムティックな漁獲記録体制が整わないバヌアツのような開発途上にある島嶼国にて、信頼性の高い沿岸漁業に関する漁獲データを得て漁獲量に関する傾向を見極めることは容易ではない。その中で、より現実的な漁獲量の推定を試みる調査 (Gillett and Lightfoot 2002, Gillett 2009, Gillett 2016) によると、1999 年から 2014 年の 15 年間において、沿岸の自家消費漁業による漁獲量は 2,800 トン前後で大きな変化は見られない。一方、沿岸での産業的漁業においては、1999 年に 230 トンであった漁獲量は 2014 年には 1,106 トンへと増加するなど、沿岸漁業全体でみると、漁獲量は拡大傾向にある。以下では、裾礁の縁までのサンゴ礁海域と裾礁以遠の海域それぞれでおこなわれる漁撈について概観する。

(1) サンゴ礁海域でおこなわれる漁撈

浅瀬のサンゴ礁海域でおこなわれる漁撈 (nearshore fishing) は、漁具を用いない、あるいは簡易な漁具のみを用いる漁法が中心であり、異なる文化集団間では漁撈の様子も異なるものの、スピア、釣り、刺し網漁、素潜り漁、籠漁などが一般的におこなわれる。中でも人々の生活にとり最も重要な漁撈は、貝、ナマコ、タコ、イセエビ、カニ、ウニ、その他の無脊椎動物の採捕活動である。採捕活動は資本を殆ど要せず、そのため誰でも容易に漁撈へ参加できることもあり、多くの人々が参加する最も一般的な漁撈形態である。採捕活動の担い手の中心は女性や子供であり、現在では採捕された水産物の大半は食料に供され、一部が現金収入用の加工に回される。Gereva & Vuki (2015) によると南部の島、アニワ島では女性の住民の 90% は貝などの採捕活動に従事している。女性は一日の時間の多くをガーデンの手入れ等に費やすが、干潮時になるとその作業を止め現れた干潟へと移動

4) 主にフェダイ科に属す 17 種がプレと呼ばれるが、ハマダイ属 (*Etelis*) の 3 種が水揚げの半分以上を占める (VFD 2016: 2-3)。語源はフランス語のニワトリであり、癖のない白身の肉質からこのように呼ばれていると考えられる。

し、マルサザエ (*Turbo setosus*) やタコなどの採捕活動をおこなう。採捕には枝以外の道具は用いず、作業は素手でおこなわれる。

一方、サンゴ礁海域での漁撈は食料のほかに、商業価値の高い輸出産品を得る場所でもある。他の太平洋島嶼国と同様、バヌアツではアジア市場に向けて輸出されるタカセガイ (*Trochus niloticus*)、ヤコウガイ (*Turbo (Lunatica) marmoratus*)、ナマコの採捕が最も重要視されてきた。タカセガイ、ヤコウガイは古くから食用利用されてきたが、19世紀には貝殻を輸出するための商業的な採捕が始まった。タカセガイはボタンや宝飾品として主に韓国や日本へ輸出され、ヤコウガイは家具、宝飾品、漆器等の象嵌用材料として主に韓国へ輸出されてきた (Amos 2007: 105-113)。ナマコは食料利用されることはなかったが、20世紀初頭には主たる輸出品目の一つに数えられるようになった (ibid. 133-140)。これらの採捕の担い手も主に女性や子供で、地方村落の重要な現金収入源であった。



写真2 リーフで釣りをする子どもと女性

こうした貝類、ナマコ類はあまり活発に移動しないうえ、国際取引価格の変動といった外的要因により乱獲につながるリスクに晒されるため、資源枯渇に陥りやすい。タカセガイとヤコウガイは、1970年代に生産量のピークを迎えたのち資源状態は悪化の一途を辿り、1990年代半ばにはほぼ取り尽くされたと考えられている (Pakoa, William et al. 2014)。ヤコウガイについては、2005年には水産局が全国的な15年間の採捕モラトリアムを発令し、現在でもその措置は続いている。またタカセガイについては採捕自体は認められているものの、輸出のための商業的採捕は漁業局の許可を要する。ナマコについては、輸出が1930年代から1970年代にかけて停滞したことにより生産量も減少したが、1980年代に中国向け輸出規制が取り除かれると再び生産量は増加した。(Amos 2007: 136)。しかし、90年代をピークにナマコ資源は減少し、2008年には5年間の全面禁漁の措置が取られるに至った (Pakoa, Raubani et al. 2013)。

(2) 裾礁の外縁近辺でおこなわれる漁撈

天候や海況からより大きな影響を受けやすいため危険と考えられるサンゴ礁海域の外縁近辺での漁撈は、男性が中心となりおこなわれる。また、漁場まである程度の距離を移動したり、漁具の曳き廻しをおこなったりすることから、現在では動力船が用いられることが多い。この海域では主に前述のプレと呼ばれるタイ類を狙う縦縄漁 (vertical dropline) や底延縄漁 (deep-bottom longline) がおこなわれる。これらの漁法は1980年代に南太平洋委員会 (当時) により技術導入されたものである (Vanuatu Fisheries Department 2016)。

また、この海域では浮魚礁を利用したマグロ類の回遊魚を狙う漁撈も盛んにおこなわれている。バヌアツで浮魚礁が利用され始めたのは、南太平洋委員会の支援を受けた1980年代からである。これは、資源利用の激しいサンゴ礁魚類やイセエビ等の資源に対する漁獲圧を抑えるため、それまで比較的未開発であったサンゴ礁の先にある沿岸海域での漁場開発をおこなうためになされた (Amos, Nimoho et al. 2014)。以降、JICAの協力もあり、バヌアツ各地には多くの浮魚礁が設置された。漁民は、曳き縄漁 (trolling) をおこない、浮魚礁付近に集まるキハダ、カジキ、シイラ、ワフーといった魚を獲る。これらの漁撈活動においても女性は無関係ではない。例えば、底延縄漁ではタコやヤドカリから作る多くの餌が必要となるが、これらを集めてくるのは女性の役目である (Gereva and Vuki 2015)。また、漁具の錘として用いる石を集めることや、船上での食事の用意、ポストハーベストでの漁獲の処理も女性が担う役割である。

4. 慣習的の海域所有制度と沿岸資源管理

バヌアツにおけるサンゴ礁海域の水産資源の利用や管理は、慣習的の海域所有制度 (customary marine tenure)⁵⁾に基づきおこなわれている。慣習的の海域所有制度のもとでは、海岸に面する土地の慣習的所有者は、その土地の延

5) 伝統的の海域所有制度 (traditional marine tenure) と呼ばれることもある。

長線上にあるサンゴ礁海域についても慣習的所有権を有するとし、海域の利用や管理に関する権利を持つ。こうした慣習的所有権の及ぶ海域は、海岸を起点とし青色の浅瀬が深い紺色に変わる裾礁の縁までとされる。また、慣習の海域所有制度は法的にも認められており、1980年の独立時に発布された憲法第12条73項及び74項では、バヌアツ国内の全ての土地は永久に慣習的所有者 (custom owners) やその子孫達に属するとした。そして土地改革法 (Land Reform Act) では、その対象となる土地は陸上だけでなく、海中にある地先のリーフの端までの土地を含むと定められた。

慣習の海域所有制度の土地の所有形態は一様ではない。土地は氏族 (クラン) 全体による所有、村による所有、チーフによる所有、または家族の構成員に分割される所有など、文化集団により様々な形態が見られる (Hickey 2007)。また、海域が人々の間で共同所有されている場合でも、新たに移住してきた者たちの利用権は二次的なものとして扱われることがあるなど、所有者間での優先順位や利用制限などの取り決めも存在する (Hickey 2006)。

慣習的土地所有者は、土地が面するサンゴ礁海域の排他的な利用権を有すると考えられる。例えば、エファテ島東部では、サンゴ礁海域は村が慣習的所有権を持つと考えられ、村民以外の人々が利用する場合は村落のチーフからの許可が必要だとされる。一方、アニワ島では島民全てが共同利用できるラグーンと家族単位で所有されるサンゴ礁海域が混在する。サンゴ礁海域は慣習的土地所有者である家族により所有され、採捕などの漁撈を営めるのは、家族の構成員か、または家族から許可を得た者だけである (Gereva and Vuki 2015: 20)。無許可で立ち入り水産物を得ると、慣習的な罰金を支払うことを求められる。また地域によっては、慣習の海域所有者は海域のみならず、水産資源をも所有すると考えられる (Amos 2007)。

沿岸資源管理において慣習の海域所有制度は有用であると考えられる。その最大の要因は、海域の利用者し明確化し、外部者の利用を排除することでできる仕組みにある。すなわち、海域やその水産資源の利用者が不特定多数ではなく、限られた自集団の人々のみであるという認識は、将来に渡って資源が利用できるよう、自律的に資源利用に必要な規則を定め管理していくための動機につながるのである。

こうした海域における資源利用における規則の多くは、「カスタム (kastom)」と呼ばれる超自然的な力に基づく伝統的な世界観に基づく。バヌアツでは19世紀以降、各地でキリスト教への改宗が進んだが、現在でもカスタムは人々の生活に強い影響を及ぼす。沿岸資源の利用においても精霊の存在が重視され、資源利用に関する様々な行動を制限してきた。Hickey (2003: 123-127) によると、古くは様々な事由によりサンゴ礁海域に一定期間タブー・エリア (taboo area, 禁漁区) を設定し、儀礼や饗宴時等に禁漁を解くことがおこなわれてきた。タブー・エリアの口開け時には、シャーマンが精霊世界へ働き掛け、豊漁を願ったという。また、様々な禁忌も存在し、例えば、漁に出るのを他者に目撃されたり、出漁前に性行為をおこなうことは禁じられた。食に関する禁忌も多く、自らが属す集団のトーテムである水産物や亡くなった人が生前好んでいた水産物を食べることが避けられたりした。更に、ウミガメ、イセエビ、タコ等の水産物を食べた後にガーデンに野菜を植えることや、海水に触れた足でガーデンに立ち入ることを禁忌とするなど、耕作に関連付けられたものもある。これらを破ると、精霊の力により不漁となるとされたり、他の災いをもたらされるとされたため、禁忌のルールは厳格に守られていたという。一方、こうしたルールは実質的に人口抑制、特定の生物種の漁獲圧の軽減、また作付時期における漁撈活動の抑制に繋がっており、結果として資源の持続的利用に貢献していたと考えられる (ibid.)。

キリスト教の広がりには、チーフが持つ霊的な力や精霊への信仰を大きく減じることとなり、沿岸資源の管理においても、それらは重要視されなくなった。代わりに、貨幣経済の広がりや浸透は、特に地方部では商業価値の高い水産資源の貿易による現金収入の確保という沿岸資源管理の新たな目的を与え、現在でもバヌアツ社会では広く村落単位による自律的な沿岸資源管理が実践されている (写真3)。最も一般的な管理手法はタブー・エリアの設定だが、日々の漁撈活動を通して、漁場の海洋生態系の身近な観察から得た豊かな地域環境知 (local ecological knowledge: LEK)⁶⁾に基づき、生物種ごとの制限、漁場の制限、漁具の制限、食べることの禁止等のルールが設けられることもある。定められたルールを破る者に対しては、ナカマル (nakamal) と呼ばれる集会所にてチー

6) 地域環境知とは、何世代もの長期間に渡る直接的な観察や経験に基づいた特定の地域の生態系に関する知識体系 (Ruddle and Davis 2013: 84) を指す。類義語として traditional ecological knowledge (TEK), indigenous knowledge (IK) 等が挙げられる。またその日本語訳も、地域知、在来知、環境知、地域環境知、先住民知、伝統知、伝統的生態系知識など多様である。



写真3 海域がタブ・エリアであることを示すために立てられた、ナメレ (namele) と呼ばれるソテツの葉が付けられた枝 (筆者撮影)

フによる裁きを受け、伝統的財貨の支払いを課されるなどの罰を受けることになる (Johannes and Hickey 2004: 32)。村落単位の資源利用に関するルールは、政府によるフォーマルな資源管理ルールとともに重視され、沿岸資源管理の根幹をなしている。

慣習的の海域所有制度と村落単位の沿岸資源管理の実施は、バヌアツ政府の漁業管理政策にもコミュニティ基盤型沿岸資源管理 (Community-based Coastal Resource Management: CBCRM) に取り入れられている。Johannes (1998 b) によると、バヌアツのような多様な生物種を対象とする小規模漁業がおこなれ、漁獲や生態系に関するデータを得ること自体が困難である国では、西欧科学に基づいた資源管理制度を構築し運用していくためには財政上、技術

上大きな制約が生じる。このような自律的な沿岸資源管理制度は、実施にかかる財政的、技術的負担をできるだけ少なく留めるため、現実的かつ有効な方策であると言える。また、こうしたローカルな資源利用者が主体的に資源管理に関する規制を定め監視することは、中央集権的な資源管理と比べ、より効果的な資源管理を可能にする。

5. 沿岸資源管理における課題

まず1点目は、若年層の間には地域環境知の価値を軽視し、村落による資源管理ルールを蔑ろにするようなことも増えているという指摘である。Hickey (2006: 18, 2008: 16) は、学校教育のあり方にその原因の一つを見出している。バヌアツでは、地方部では子どもたちが中等教育を受けるために土地から離れ長期間に渡り生活を余儀なくされる。そのため、子どもたちはその間、沿岸資源に関わる地域環境知を学び実践する機会が奪われてしまう。西欧式カリキュラムにおける学校教育では、地域環境知や慣習的な沿岸資源管理は十分に上げられず、学生たちはその価値や意義を認識する機会を得ることは限られている。こういった問題は決してバヌアツに限ったことではなく、慣習的資源管理手法を実践する他の太平洋島嶼国においても見られる (Ruddle and Hickey 2008)。

2点目は、先述のタカセガイやヤコウガイの例でも明らかな通り、急激な水産資源の商業化に対して、慣習的資源管理体制が有効に対処できないことである。近年急成長を遂げる観光産業と、それに伴う過剰な沿岸資源利用もその一例として挙げられる。観光セクターによる生産額は GDP の 16% を占め、2008 年時点で 3,800 のフル・タイムの仕事を生み出しているなど (Verdone and Seidl 2012)、バヌアツにとり観光は一際重要な産業である。年間の総到着数は約 35 万人 (2018 年)⁷⁾で、うち 3 分の 2 は主にオーストラリア人やニュージーランド人を乗せた大型観光クルーズ船からの観光客である。エファテ島、エスピリトゥ・サント島、南部のアネイチウム島などの島々にはこうした大型観光クルーズ船が定期的に寄港し、観光客は 10 時間程度滞在した後、再び船に戻り次の寄港地へと移動する。クルーズ船寄港地の人々にとり、観光客を相手とした水産物の提供は重要な収入源であるため、水産資源は乱獲に晒されやすい。例えば、アネイチウム島には 1980 年代より、オーストラリアからの観光クルーズ船が停泊するようになり、島を訪れる観光客への販売を目的に、島民はシマイセエビ (*Panulirus penicillatus*) の採捕を活発化させるようになった (Pakoa, Kaku et al. 2012)。島でのイセエビ漁は慣習的所有者がそれぞれの海域にておこなっていたが、寄港する観光クルーズ船の増加に伴って体長制限を下回る個体や抱卵する個体までが採捕されるようになり、漁獲圧力は急激に上昇した。2006 年より開始された JICA の「豊かな前浜プロジェクト」では、個体の体長制限を 2 cm 伸ばしたり、浮魚礁周辺での漁業を振興するなど、現在イセエビの資源回復を図っている (国際協力機構 2014: 9, 17)。

3点目は、外部者による沿岸部におけるリゾートやホテルといった観光施設、あるいは邸宅の開発による影響である。バヌアツでは土地は慣習的所有者 (custom owner) により所有され、外国人といった外部者による所有

7) バヌアツ国家統計事務所 (VESO) の Statistics Update: International Arrival Statistics (December 2018 Highlights) の情報による。

は認められない。しかし、外部者が慣習的所有者から土地をリースすることは認められており、そうした取り引きはエファテ島やエスピリトゥ・サント島、その他観光地を抱える島々を中心に活発におこなわれている。2010 年時点でバヌアツ全土の土地の 9.5% がリースされており、このうちエファテ島では都市部の 69.5%、地方部の 43.5% もの土地がリースされていた (Scott, Stefanova et al. 2012)。リースされた土地の多くは大規模なプランテーションや放牧地などに利用されているが、近年では海岸線に沿ってリゾート、レストラン、邸宅などの開発が目立つ。これらが建設されると、土地の周りには堅牢な塀が巡らされるため、幾つもの土地区画が連続してリースされた場合、人々の海へのアクセスは数百メートルから数キロに渡って壁で遮られることになる。そのため、容易にサンゴ礁海域での漁撈活動をおこなえなくなった資源利用者と土地賃借人との間でしばしば紛争が起こっている。また、土地法では沿岸の土地がリースされた場合でも、慣習的土地所有者によるサンゴ礁海域の専有は維持されるとするが、これが守られないケースも散見される。エファテ島では、漁撈を営むために慣習の海域所有するサンゴ礁海域へと立ち入った住民に対して、土地賃借人が罵倒や脅迫等の嫌がらせをおこなう紛争が幾つも報告されている。

こうした慣習的所有される土地のリースを巡る課題は、容易に解決されない。リース期間は 75 年という長期に渡るケースが大半で (Farran 2002)、リースを受けた者や企業 (その殆どはオーストラリアやニュージーランドからの個人や開発業者) は巨額の資金を投じ様々な開発をおこなう。土地法では、リース期間終了後に慣習的所有者側がリースの継続をおこなわない場合、慣習的所有者は賃借人に対して、開発に要した費用を支払い、建物等を買収する必要があるとされる。インフォーマル経済が支配的な地方部の慣習的土地所有者が、多額の現金を保有することは不可能に近く、結果、賃借人に有利な条件でリース契約を延長せざるを得ない状況が生じることになる。つまり、慣習的所有土地のリースとは、実質的には「売却」と変わらないのが現実である。2013 年には「慣習的土地管理法 (the Custom Land Management Act)」が制定され、慣習的所有者の権利保護の強化、外国人投資家へのリースやサブリースの制限強化が図られたが、法の実施には様々な要因により進んでいないのが実態である⁸⁾。こうした土地を巡る事態は、人々の食料安全保障に悪影響を与え、現金収入の機会を奪うものである。

おわりに

本稿では、バヌアツ社会におけるサンゴ礁海域の重要性について論じてきた。サンゴ礁海域は多くの資本を必要としない動物性タンパク質源として、また同海域は頻繁に自然災害の被害を被るバヌアツの人々が食糧不足に陥った際の「食料備蓄庫」としての役割も果たしてきた。また伝統的な物々交換が支配的な農村部においては、海域で採捕される水産物は教育や医療等に必要な現金収入を得る手段である。海域の管理は慣習の海域所有と地域環境知による伝統的沿岸資源管理制度により実施されており、信頼できる科学データが乏しく、財政的制約の大きな熱帯沿岸地域では現実的かつ効果的な資源管理制度であるといえる。一方、現代的な社会的現象は、伝統的沿岸資源管理体制を揺さぶり、人々のサンゴ礁海域の利用や管理に様々な影響を及ぼしている。

沿岸資源管理は海域や水産資源をめぐる資源利用者のガバナンスが重要であるのは言うまでもないが、特に土地利用をめぐる状況が非常に複雑なバヌアツでは、人々の沿岸資源の利用と管理に密接に関わる沿岸の土地の所有形態や開発から沿岸資源管理を考えることも重要である。しかし、こうした分野での研究蓄積は十分になされておらず、今後この分野での研究の進展が期待される。

謝辞

本稿執筆に係る現地調査は、日本学術支援機構の科学研究費助成事業 (基盤研究 (C) 一般、課題番号: 17K02057) による資金を活用し実施した。また、現地調査では JICA の「豊かな前浜プロジェクト フェーズ 3」に従事するアイ・シー・ネット (株) の枝浩樹氏、インテムコンサルティング (株) の越後学氏により多大なる支援を頂いた。また、エファテ島マンガリリウ村のハリー・カルコア氏をはじめ、訪問した村落、官公庁、NGO の方々に貴重な時間を頂き、辛抱強く私のインタビューに付き合ってくれた。ここに深謝の意を表す。

8) Farran & Corrin 2016 “Developing Legislation to Formalise Customary Land Management: Deep Legal Pluralism or a Shallow Veneer?” *Law and Development Review* 10(1) pp.1-27 に詳しい。

引用文献

- Amos, G., G. Nimoho, M. Fujii, A. Seko, M. Inuma, K. Nishiyama, T. Takayama and K. Pakoa (2014). "New FAD development approach strengthens community-based fisheries management in Vanuatu." *SPC Fisheries Newsletter* **144**: 40-47.
- Amos, M. J. (2007). Vanuatu Fishery Resource Profile. *IWP-Pacific Technical Report (International Waters Project)*. Apia, Samoa. **49**: viii-195.
- Caminade, P., D. Charlie, U. Kanoglu, S.-I. Koshimura, H. Matsutomi, A. Moore, C. Ruscher, C. Synolakis and T. Takahashi (2000). "Vanuatu earthquake and tsunami cause much damage, few casualties." *Eos, Transactions American Geophysical Union* **81**(52).
- Eriksson, H., J. Albert, S. Albert, R. Warren, K. Pakoa and N. Andrew (2017). "The role of fish and fisheries in recovering from natural hazards: Lessons learned from Vanuatu." *Environmental Science & Policy* **76**: 50-58.
- Farran, S. (2002). "Land Leases: Research: Ministerial Leases in Efate, Vanuatu." *Journal of South Pacific Law* **6**. Retrieved from <http://www.paclii.org/journals/fjspl/vol06/6.shtml>
- Gereva, S. and V. Vuki (2015). "Women's fishing activities on Aniwa Island, Tafea Province, South Vanuatu." *SPC Women in Fisheries Information Bulletin* **21**: 17-22.
- Gillett, R. (2009). Fisheries in the Economies of the Pacific Island Countries and Territories. Mandaluyong City, Philippines, Asian Development Bank.
- Gillett, R. (2016). Fisheries in the Economies of Pacific Island Countries and Territories. Noumea, New Caledonia, Pacific Community (SPC).
- Gillett, R. and C. Lightfoot (2002). The Contribution of Fisheries to the Economies of Pacific Island Countries. Manila, Asian Development Bank.
- Hickey, F. R. (2003). Traditional Marine Resource Management in Vanuatu: World views in Transformation; Sacred & Profane. *Putting Fishers' Knowledge to Work*. N. Haggan, C. Brignall and L. Wood. Vancouver, Fisheries Centre, University of British Columbia. **11-1**: 117-137.
- Hickey, F. R. (2006). "Traditional marine resource management in Vanuatu: Acknowledging, supporting and strengthening indigenous management systems." *SPC Traditional Marine Resource Management and Knowledge Information Bulletin* **20**.
- Hickey, F. R. (2007). Traditional marine resource management in Vanuatu: Worldviews in transformation. *Fishers' Knowledge in Fisheries Science and Management*. N. Haggan, B. Neis and I. G. Baird. Paris, UNESCO Publishing. **4**: 147-168.
- Hickey, F. R. (2008). "Nearshore fisheries and human development in Vanuatu and other parts of Melanesia." *SPC Traditional Marine Resource Management and Knowledge Information Bulletin* **24**: 9-18.
- Johannes, R. E. (1998). "The case for data-less marine resource management: examples from tropical nearshore finfisheries." *TREE* **13**(6) : 243-246.
- Kronen, M. and A. Vunisea (2007). "Women never hunt – but fish: Highlighting equality for women in policy formulation and strategic planning in the coastal fisheries sector in Pacific Island countries." *SPC Women in Fisheries Information Bulletin* **17**: 3-15.
- Kronen, M. and A. Vunisea (2009). "Fishing impact and food security – Gender differences in finfisheries across Pacific Island countries and cultural groups." *SPC Women in Fisheries Information Bulletin* **19**: 3-10.
- Pakoa, K., R. Kaku and T. Nimitia (2012). "Status of pronghorn spiny lobster fishery in Aneityum Island, Vanuatu, and management advice." *SPC Fisheries Newsletter* **138** (May/August): 31-36.
- Pakoa, K., S. Nagashima, G. Amos, V. Malverus, T. Takayama, A. Seko and H. Terashima (2019). "The role of fisheries resources and community-based coastal resource management activities during a natural disaster – Case study of Vanuatu after Tropical Cyclone Pam." *SPC Traditional Marine Resource Management and Knowledge Information Bulletin* **40**: 18-32.
- Pakoa, K., J. Raubani, F. Siaosi, G. Amos and J. Ham (2013). The status of sea cucumber fisheries and resources in Vanuatu. Noumea, Secretariat of the Pacific Community: ii-40.
- Pakoa, K., A. William, P. Neihapi and K. Kikutani (2014). The status of green snail (*Turbo marmoratus*) resource in Vanuatu and recommendations for its management. Noumea, Secretariat of the Pacific Community: i-36.
- Posth, C., K. Nagele, H. Colleran, F. Valentin, S. Bedford, K. W. Kami, R. Shing, H. Buckley, R. Kinaston, M. Walworth, G. R. Clark, C. Reepmeyer, J. Flexner, T. Maric, J. Moser, J. Gresky, L. Kiko, K. J. Robson, K. Auckland, S. J. Oppenheimer, A. V. S. Hill, A. J. Mentzer, J. Zech, F. Petchey, P. Roberts, C. Jeong, R. D. Gray, J. Krause and A. Powell (2018). "Language continuity despite population replacement in Remote Oceania." *Nature Ecology & Evolution* **2**(4): 731-740.
- Ruddle, K. and A. Davis (2013). "Local Ecological Knowledge (LEK) in Interdisciplinary Research and Application: a Critical Review." *Asian Fisheries Science* **26**: 79-100.
- Ruddle, K. and F. R. Hickey (2008). "Accounting for the mismanagement of tropical nearshore fisheries." *Environment, Development and Sustainability* **10**(5): 565-589.
- Scott, S., M. Stefanova, A. Naupa and K. Vurobaravu (2012). Vanuatu National Leasing Profile: A Preliminary Analysis. *Justice for the Poor: Promoting equity and managing conflict in development*. Washington DC, The World Bank. **7**: 1-12.
- United Nations University Institute for Environment and Human Security (2017). WorldRiskReport 2016. Berlin.

- Vanuatu Fisheries Department (2016). Vanuatu National Deep-Bottom Fish Fishery Management Plan. Port Vila: iv-20.
- Verdone, M. and A. Seidl (2012). Fishing and Tourism in the Vanuatu Economy. Gland, Switzerland, International Union for Conservation of Nature: 20 pp.
- World Vision (2018). 2015 Cyclone Pam: Facts, FAQs, and how to help. (2018 年 7 月 3 日) <<https://www.worldvision.org/disaster-relief-news-stories/cyclone-pam-facts>> (アクセス日: 2019 年 12 月 18 日)
- マ克蘭シー, ジェレミー (2007). 一石二鳥 - To Kill a Bird With Two Stones - 南太平洋バヌアツ小史. 仲誠一 (訳). ポート・ヴィラ, バヌアツ カルチュラルセンター.
- 内藤真帆 (2015). “ツツバ語の舌唇音と名詞句 - 言語変化に関する一考察 -.” 東京女子大学紀要論集 65(2): 181-200.
- 吉岡政徳 (2018). 豚を殺して偉くなる: メラネシアの階梯制社会におけるリーダーへの道, 風響社.
- 国際協力機構 (2014). バヌアツ国 豊かな前浜プロジェクト (フェーズ 2) 終了時評価調査報告書.